

英語コーパス学会 Newsletter No. 55

Dec. 1, 2006

■会長: 中村 純作
■事務局: 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学 赤野一郎研究室
■TEL: 075-322-6103 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: i_akano@kufs.ac.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

第 28 回大会報告 概 要

英語コーパス学会第 28 回大会は、10 月 7 日(土)、北海道大学高等教育機能開発総合センターの大講堂で開催されました。関西と関東から遠方の地であったこととあいにくの雨模様の天候のため 67 名(会員 52 名、新入会員 2 名、当日会員 13 名)と、参加者は例年ほど多くありませんでしたが、意欲的な研究発表と、CHILDES をテーマにした初めてのワークショップと特別講演が行われ、充実したプログラム内容でした。

午前中のワークショップは「発話データベース CHILDES 入門」と題して宮田 Susanne 先生(愛知淑徳大学)に講師を務めていただき、35 名の参加者がありました。概要につきましては、3 ページ以下の山崎俊次先生(大東文化大学)の報告をご覧ください。

午後の大会では、中村純作会長(立命館大学)の開会の挨拶のあと、開催校を代表して言語文化部長の杉浦秀一先生にご挨拶をいただきました。学会賞選考委員長の中尾佳行先生(広島大学)より、第 5 回の学会賞の発表と選考経過の説明があり、引き続き授賞式が行われ会長より受賞者に賞状と副賞が授与されました(第 6 回学会賞の募集をしております。5 ページの規定に従い奮ってご応募ください)。

引き続き研究発表 4 件と特別講演が行われました。今回は、英語の構文分析 2 件と中高の英語教科書に関わる発表が 2 件でした。その概要につきましては、司会の先生にご執筆いただきました「研究発表」をご覧ください。

大会終了後の懇親会には 35 名の出席がありました。加野(木村)まきみ先生(文化女子大学室蘭短期大学)司会のもと、会長挨拶の後、三浦省五先生(福山大学教授)の乾杯のご発声で懇親会が始まりました。会員同士の交流と情報交換

で盛り上がり、午後 8 時にすべての大会行事が終了いたしました。

例年ほどの参加者は望めませんでしたが、北海道大学の先生方と院生が出席してくださいました。「素晴らしい学会でした」、「運営はとてもスムーズで良かった」などのアンケートのご回答をいただき、事務局としてホッとしております。これも、開催校である北海道大学の園田勝英先生と高見敏子先生の献身的なお力添えがあつてのことでした。また、会場を提供頂いた北海道大学言語文化部にも、この紙上を借りて厚くお礼申し上げます。学生の皆さんにも、会場準備、受付などのお手伝いをいただき大変お世話になりました。重ねてお礼申し上げます。

第 5 回英語コーパス学会賞決定!

学会賞

受賞者: 塚本聡氏(日本大学文理学部助教授)
受賞対象: KWIC Concordancer for Windows と Treebank Search の開発と無料公開

奨励賞

受賞者: 加野(木村)まきみ氏(文化女子大学室蘭短期大学専任講師)
受賞対象: *Lexical Borrowing and its Impact on English*(ひつじ書房, 2006)

研究発表

live a happy life と live happily の交替可能性
—英語同族目的語構文と様態の副詞(句)の
交替可能性検証にむけて—

北本 徹平(大阪大学大学院生)

本発表は、安井(1982:420)において同義といわれる live a happy life と live happily をケーススタディとして取り上げ、British National Corpus と Web を検索することにより、同族目的語構文

と自動詞＋様態副詞(句)構文のそれぞれの共起語の違いから、両者が交替不可能であると主張した。具体的には、ever after(その後ずっと)という副詞的な表現が BNC や Web 検索を行うと、live happily とは多く共起するが、live a happy life とは全くではないにしても、極めて共起しにくいという新たな共起制限を指摘した。そして、その違いがあるので、従来の研究の見解と異なり、両者は交替不可能であると結論付けた。さらに、Tenny (1987, 1994)による、同族目的語はアスペクトの観点から見ると行為を終結に導く機能がある、との見解を援用することにより、同族目的語構文がもつ終結という意味と ever after がもつ「その後ずっと」という非終結的な意味とが意味的な不一致をおこすため、上記の共起制限が説明される可能性があるとし唆した。

フロアーからは、live a happy life と ever after が、少ないながらも、共起する例があるので、それらについては、詳細に吟味し、細かな検討を加える必要があること、アスペクトが絡むことで上記の共起制限が生じている可能性が強いので、Vendler (1967) 以降のアスペクト論をさらにしっかりとおさえる必要があることなどの示唆がなされた。

コーパスを検索することで、同族目的語構文についての新たな共起制限を指摘し、その共起制限の説明の方向性を示した点が評価される。今後の研究のさらなる発展が期待できる発表であった。

大室 剛志(名古屋大学)

法助動詞を伴う文における until 節の節順選択

村形 舞(東京大学大学院)

時間節は、主節との時間関係に対応する節順が好まれるため、主節の時間的な終結点を規定する until 従属節は、一般には、主節に後続すると言える。しかしながら、until 節がその主節より前に生起する場合がある。従来は、この until 節前置の現象に対して、前文との関係など、談話構造からの要因を探る研究が多かったと思うが、本発表は、特に文の範囲内に限り、until 節の前置の要因を探った点が、特徴的であった。

具体的には、BNC の書き言葉テキストより無作為に抽出した 1,000 例の until より、定形主節に対する定形 until 節をなす 384 文を観察し、文

末に until 節を持つ文(365 件)の多くは法助動詞を持たず、過去時制であるのに対し、文頭に until 節を持つ文(19 件)は主節に法助動詞を持ち、until 節が現在時制であるという特徴を発見した。さらに、この特徴は条件の if 従属節が主節に先立つ時の特徴と共通することを指摘し、上記と同じ特徴を持つ until 節でも、その主節に後続してしまう場合もあるが、それは、それら全体が嵌め込み文の位置に生起するため、until 従属節をそこでも前置すると、文理解に負担をきたすため、前置は起きないと論じた。

フロアーからは、一番問題にしている事例が 19 例というのは、それに基づいてなにかの主張をするには少ないのではないか。従属節が前置される要因には、いろいろあるだろうが、やはり談話の流れという要因がもっとも強いのではないだろうか。法助動詞といってもいろいろあるし、さらに、モダリティ要素にまで広げたら、いろいろな要素(例えば、文副詞)などもあるので、事実を詳細に検討していく必要があるのではないか、といった質問、コメントが出された。

Until 節前置を誘発する文内部での一つの興味深い要因に気付いた点は評価でき、今後様々な要因を同定することに努めることにより、それらの要因が多く整えば整うほど、until 節が前置されやすいという方向性が見えてくるのではないかと期待される。

大室 剛志(名古屋大学)

中高教科書コーパス分析と習得困難度要因に基づいた自動判別の試み

木村 恵(獨協大学)

田中 省作(立命館大学)

八島 等(東京都立城東高等学校)

依田 みずき(元東京学芸大学大学院生)

本研究は、中高校の英語学習者を対象とした語彙テスト作成の一環として行われたものである。各単語を教科書における出現状況および語彙学習を困難にしている要因の観点から自動的にレベルを判別し、語彙テストの基礎となる語彙リストを作成する方法論について論じたものである。

習得困難度の度合いを測るため、各単語の属性を「数値化」し、自動的にその単語のレベルを判定する過程で、単語の習得困難度の要因を

教科書出現学年順、頻度数、散らばり、品詞、多義性、抽象性、文化的親密度、語形上・音声上・意味上・翻訳上の類似性として、「可能な限り自動化」した。その結果、中学内容語彙の判別性能は 85.1%、機能語では 93.1%であった。

フロアーからは、習得困難の要因は妥当なものであるのか、各要因は独立した要因か、それとも相互に関係しあっているのか等活発な意見が交わされた。意欲的な研究であるが、その妥当性はさらなる研究を待たねばならないであろう。

成沢 義雄(東北学院大学)

コーパス分析と中学校英語教科書：動詞活用形の観点から

岡田 毅(東北大学)

本研究は、BNC を中心とした大規模コーパスの分析から得られる知見が、日本の中学校検定英語教科書においてどのように有効に活用されるべきかという問題提起である。

教科書英語では、動詞活用形の導入では基本形から活用変化形へという流れ、つまり「平易な形から困難な形」の順で導入されている。しかし、これは BNC の分析によれば英語の実際の使用実態とは一致しない。コーパス研究者からは英語教育への批判、提言がこれまでも多く出されているが、本研究も英語の使用実態と教科書英語のありように一石を投ずるものである。

フロアーからも活発な意見が出された。そもそも外国語としての日本の教科書英語は母語使用を基準にして編纂すべきであるのか、その論拠は何か。この論議はさらなるコーパスの研究とともに一層深化されることを期待したい。

成沢 義雄(東北学院大学)

ワークショップ・特別講演

発話データベース CHILDES

宮田 Susanne(愛知淑徳大学)

言語習得のデータベースである CHILDES の名前は聞いていたが、その内容を詳細に知っている研究者はそんなに多くはないというのが、実情ではなかろうか。専門外ではあるが、宮田 Susanne 先生の特別講演会の司会を務めた関係

でここにワークショップ、特別講演の報告をするものである。

ワークショップでは、(1) CHILDES の概要、(2) 解析プログラム CLAN のセットアップと基本的な使い方、(3) 形式フォーマットの CHAT の基礎、(4) 音声・画像とのリンク、(5) 形態素解析プログラム MOR と自由タグ付け Coder Mode の紹介等が行われた。比較的自由に書き込みが可能なデータベースで、言語習得のみならず、バイリンガルデータ、言語障害・手話データ等の有効な利用が可能であることが理解できた。

ワークショップはいつも時間が限定されていてその場では理解できたような気になるが、後で復習すると困難を伴うことが多い。今回は同名の書籍がひつじ書房より出版されているので、理解を深めることができたが、講師の使用コンピュータが MAC であったためにスクリーンの図と受講者の Windows パソコンのモニターとのギャップに戸惑ったという声を聞いた。

特別講演会は第 1 部でこの CHILDES の概要と解析プログラムが紹介され、第 2 部ではこの発話データベースを使った研究の事例報告が行われた。発話データベース CHILDES (チャイルズ、Child Language Data Exchange System) は、発話データ、データ表記のフォーマット CHAT (Codes for the Human Analysis of Transcripts)、そして分析プログラム CLAN (Computerized Language Analysis) からなるシステムの名称である。この発話データベースは、1984 年に北米・ヨーロッパの幼児言語研究者 20 人が考案したものであるが、今では 4,500 人の研究者が登録し、30 カ国の言語を含む多種多様な言語データベースに成長している。データの種類は第一言語習得・第二言語習得データ、バイリンガルデータ、言語障害・手話データ、story telling データ、オーディオ・ビデオ付きデータがあり、それらを解析するのに用いられる言語解析プログラム CLAN の利用によりタグ付けやさまざまな分析が可能になっている。たとえば、単語の頻度(FREQ)、発話数・単語数および平均発話長(MLU)、特定の単語を含む発話のリスト(KWAL)、形態素解析 (MOR) 等の分析が可能である。さらにその発話データの音を聞き (Sonic CHAT)、画像をみる (Movie CHAT) こと

によって、その利用と信頼性が増すのである。この発話データベースを使った事例報告では、英語コーパス学会ということもあり、過去の英語の研究例として、年齢による発達の変化を扱った filler の研究 (Peters 2001) が取り上げられた。

この CHILDES は非営利なので無料でデータが利用でき、分析プログラムも簡単にダウンロードできる。また日本語データベースを構築する目的で JCHAT が設立されており、日本語環境の整備にあたっている。詳細は以下のサイトを参照されたい。

<http://childes.psy.cmu.edu>

<http://chat.cyber.sccs.chukyou-u.ac.jp/JCHAT/>

山崎 俊次(大東文化大学)

ハンドアウトのダウンロードサービス

第 28 回大会のワークショップと研究発表のハンドアウトを希望される会員に対して、ダウンロードのサービスを行います。期間は、このニューズレターお届けより 12 月 21 日までとします。ファイルは PDF となっております。ご希望の方は、石川保茂 (yasuishikawa@hotmail.com) まで下記のハンドアウトのうちご希望の番号をお知らせください。追って URL をお知らせいたします。

1. ワークショップ：発話データベース CHILDES 入門
2. live a happy life と live happily の交替可能性
3. 法助動詞を伴う文における until 節の節順選択
4. 中高教科書コーパス分析と習得困難度要因に基づいた自動判別の試み
5. コーパス分析と中学校英語教科書：動詞活用形の観点から

末尾になりましたが、資料を提供くださいました方々のご厚意に感謝いたします。

学会誌『英語コーパス研究』第 14 号について

『英語コーパス研究』第 14 号 (2007) に多くのご投稿をいただきありがとうございました。6 月末の時点では、論文 4 件、研究ノート 1 件の申し込みでしたので、いささか心配をしております

ましたが、9 月末の原稿締め切り時には 12 件(内訳は、研究論文 8 点、シンポジウム論文 3 点、研究ノート 1 点)の申し込みがありました。これは、前回の数を上回る応募でした。また、扱う内容も、統語論から英語史、あるいはコーパス作成について論じるものまで広範囲に及んでいます。現在、査読審査をほぼ終了し、採否決定、必要に応じて改訂などをお願いしているところです。来春の刊行に向け、現在、印刷工程に向けて進行中です。

学会誌は、学会員の活動を表す指標とすることができそうです。今回、このように多数の論文の応募があったことは、学会員が活発に活動されていることの証でもあります。今後とも、このような活発な活動が続くことを願います。また、学会誌についてお気づきの点があれば、お知らせください。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
塚本 聡(日本大学)

第 29 回大会研究発表募集

2007 年度の春期大会(第 29 回大会)は 4 月 28 日(土)に同志社大学京田辺キャンパス (<http://www.doshisha.ac.jp/>)で開催される運びとなっております。つきましては、大会での研究発表を次の要領で募集いたします。発表を希望される方は、下記の要領に従って、電子メールで事務局にお申し込みください。

- 【資格】本学会会員であること。
- 【内容】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた英語研究。
- 【提出物】発表要旨を A4 判 25 字×32 行で 3~4 枚以内にまとめ Word、一太郎、PDF ファイルのいずれかで提出すること。ただし、参考文献表は枚数に含めない。要旨の冒頭には題名のみを記す。メール本文には氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記すること。

【応募締切】2007 年 1 月 9 日(火)必着

【採否決定】2007 年 1 月末日

【発表時間】発表 20 分+質疑応答 10 分

学会賞応募規定

第 6 回の学会賞を募集致します。応募規定は次の通りです。

【対 象】 英語コーパス学会の目的に照らし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員(個人またはグループ)とする。ただし、奨励賞は英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績(論文の場合、学会誌『英語コーパス研究』に掲載されたものに限る)をあげた 35 歳以下または大学院修了後の研究歴 5 年以下の学会員個人に限る。

【応募方法】 自薦、他薦を問わない。

【提出書類】 1) 所定の推薦理由書(学会ホームページより入手)。
2) 論文の場合は抜刷りまたはコピー。単行本の場合は事務局で用意するので同封は不要。

【提出先】 事務局

【応募期限】 2007 年 3 月 31 日

【発 表】 2007 年度秋季大会

東支部活動報告

9 月 17 日に大東文化大学で第 4 回英語コーパス学会東支部研究談話会が開催され、発表者を含め 15 名の参加がありました。

小林雄一郎氏(法政大学大学院)が、「タグ頻度解析による学習者レベルの識別—The NICT JLE Corpus を例に」、大羽良氏(早稲田大学非常勤講師)が「Web 形式による日英対訳コーパスの検索システムの開発とその活用例」のタイトルでそれぞれ発表されました。

小林氏は多変量解析を用いて、The NICT JLE Corpus における発達指標について論じ、CLAWS4 (C7 tagset) で情報付与したデータにコレスポンデンス分析を実行し、学習者の SST レベルとの相関を調べ、初級者と上級者を分ける品詞・文法項目の使用頻度を明らかにされました。大羽氏はタガーで品詞付けされた日英対訳コーパスを Web 上で検索できるツールを独自に開発されました、ご発表ではその機能(KWIC 表示、ジャンル別語彙表、ジャンル別品詞表、関連対訳語検索)の紹介と、日英対照研究

や語学授業への活用の具体例を示されました。どちらの発表とも、とても興味深い内容で、今後の大会での発表、学会誌への掲載が期待されます。

11 月 18 日中央大学後楽園キャンパスで、大東文化大学の招聘で来日中の Dr. Sebastian Hoffmann 氏(ランカスター大学)に、“Investigating Language Change: Grammaticalization and Corpus Data” の演題でご講演いただきました。

短期間の滞在でお忙しいにもかかわらず、快くお引き受けていただいた Hoffmann 先生に厚くお礼申し上げます。会員の方々へのご案内期間が短かったのと、他の学会日とやむを得ず重なった点については、お詫びいたします。

参加者は 10 名ほどでしたが、講演後の質疑応答では、ほぼ全員から質問やコメントが出され、活発な講演会になりました。なお、この講演会は、中央大学人文科学研究所の後援も受けたことを付記させていただきます。

東支部支部長
新井洋一(中央大学)

新入会員紹介(12 月 1 日現在、S は学生)

和泉 絵美 独立行政法人 情報通信研究機構
自然言語グループ

大友 千乃 東北大学大学院 国際文化研究科 S
篠原 勇次 足利工業大学 共通課程 英語研究室

住吉 誠 摂南大学

早坂 慶子 北星学園大学

三浦 愛香 フリーランス教材編集者

山田 義裕 北海道大学 言語文化部

事務局から

2006 年度会費未納の会員の方々は同封の払込取扱票にて納入をお願いいたします。

2004 年度および 2005 年度会費未納の会員の方々には「会費納入のお願い」と払込取扱票を同封させていただきました。会費納入にご理解・ご協力いただきますよう、お願い申し上げます。なお、会費納入等に関するお問い合わせは、石川保茂(yasuishiakwa@hotmail.com)までお願いいたします。

事務局では、シンポジウムやワークショップの企画・アイデアを随時募集しております。

英語コーパス学会の大会プログラムとしてふさわしい内容のものがありませんでしたら、どしどしご提案ください。

FORUM 欄への投稿もお待ちしております。海外の学会・研究の動向、新刊・近刊図書の紹介、身近なコーパス研究のエピソード等でも結構ですでお寄せください。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

FORUM

新刊紹介

中村純作(立命館大学)
jnakamur@li.ritsusmei.ac.jp

最近お送りいただいた新刊、2点を今回は紹介させていただきます。

まず、本学会会員の八木克正先生(関西学院大学)による『英和辞典の研究：英語認識の改善のために』が本年10月、開拓社より出版されました。八木先生がBNCに基づいた学習辞典『ユースプログレッシブ英和辞典』(2004年小学館刊)の編集主幹であり、数多くの辞書に深いかかわりをお持ちであること、さらに、語法文法学会の会長として英語の実証的な研究の牽引力としてご活躍であることや、精力的にその研究成果をご発表であることなどは、すでに我々には衆知の事実ですが、本書はその八木先生の辞書批評の最新の成果をまとめたものです。

本書は大きく分けて3章までの理論編とそれ以降の具体的な事例を取り上げた考察編に分けられます。理論編では第1章で英語辞書学の諸問題、とりわけ何ゆえ辞書の問題を考えるのかという根本的な問題を取り上げ、第2章で英語辞書の歴史を辿り、第3章では日本の辞書に大きな影響を与えたOED、CODを取り上げ、特にCODの初版の影響で古い記述が残っていることを明らかにしています。

第4章以下は、著者が小学館ホームページ『ランゲージワールド』の「語法の鉄人」の連載記事をまとめたものです。第4章ではすでに古くなった語義、第5章では古くなった成句、第6章では語義の変化に伴う動詞の統語構造の変化、第7章では同じく形容詞の統語構造の変化を扱っています。以上は古くなったものについての考察ですが、第8章では新たな語義を獲得した結果、新たな統語構造を持つようになった例を、第9章では辞書における英文法についての記述がしばしば誤解に満ちていることを指摘しています。特に小生が興味を覚えたのは、第8章のいわゆる phraseology の重要性を論じた「13. forget/forget about it の成句的意味展開」です。forget about it と forget it において、前者は特別な意味を生み出していないのに対して、後者は phraseology として多様な意味・用法を発展させていることが、BNC と Larry King Live Corpus その他のデータを用いて詳細に分析されています。これはほんの一例ですが、本書は、数多くの辞書の用例、記述を引用しつつ、コーパスから得られる情報と組み合わせながら新しい辞書のあり方を問う、まさに実証的、経験的な語法研究の典型的な成果だと思います。

辞書の批評は、往々にして新語や新しい語義がどれほど収録されているかを基準に行われますが、著者が主張するように「今までの記述上の不備がどれほど修正されたか、古い語彙・語義・用法がどれほど排除されたか、という点」(「はじめに」より)から、地道に一つ一つの語・語義・用法を検証する必要があります。長年にわたり続けてこられた八木先生の検証作業は、日本の英和辞書発展に多大な貢献をしております。

本書は、英語分析を通して新しい辞書のあり方を問う辞書学の視点からの著作というだけではなく、英語に対する問題意識を如何に高め、より深い理解にいたるかに、ひいてはより良い英語教育の実践にも深くかかわっていることは本書の副題「英語認識の改善のために」からも読み取れます。常に言語に関する Awareness を問題とする者にとって、示唆に富んだ好著です。是非一読されることをお勧めします。(B5 版 309 頁／定価 3,400 円(外税)／ISBN 4-7589-2130-X)

次にご紹介するのは『ウィズダム英和辞典(第2版)』です。「英語のいま(現在)を映し出す最先端のコーパスを全面的に利用した初の英和辞典、次世代型英和!」をキャッチフレーズに、会員の井上永幸先生(徳島大学)と赤野一郎先生(京都外国語大学)を編者に初版が発行されたのは、ご承知のように2002年末でしたが、4年も経ないうちに、その第2版が送られてきました(2007年1月刊行予定)。初版ではなく第2版をこのコラムで紹介するのはいくつか理由があります。まず初版ではコーパスを利用したことを標榜しながらもその内容についての言及がほとんどありませんでした。今回は「三省堂コーパス」の概要がある程度明らかになっています。自前のコーパスを編纂すること自体大変で、COBUILDのThe Bank of Englishにも見られるように終わりの無い作業です。また、著作権などに関する複雑な諸般の事情もあり、全てを明らかにすることは困難かとも思われますが、自分の辞書がどのようなコーパスに基づいているのかは利用者にとっては非常に重要な情報だと思いますので、今後ともより詳しい情報提供を期待したいものです。

「コーパス分析をさらに深化! 英語の現在を鋭く映す」というコピーにも表されているように、第2版では、より充実したコーパスに基づき頻度表示や、頻度順の語義配列にも改訂がなされているほか、重要語に関してはその記述も大幅に改訂されています。従来の語法や類義語に関する囲みや“!”で示される注記に加えて、頻度情報やコロケーション情報を扱う「コーパス頻度ランク」や「コーパスの窓」などの新しい囲みも登場、その他、特定のジャンルや分野に関する「関連」、歴史・文化などの背景理解に役立つ「事情」などの囲みも大幅に増えています。従来からある誤文訂正に加えて、「作文のポイント」「読解のポイント」なども付加され、学習辞典としての情報が全体として豊富になっています。その分、活字が小さくなったことは仕方の無い事情でしょうか。

ここで、たまたま目にした改訂の例をご紹介します。小生の趣味はペーパーバックの濫読ですが、T. Clancy, M. Chrichton, J. Grishamなどの新作が出ないので、ふと手にしたNelson Demilleに最近凝っています。皮肉たっぷりにベトナム戦争や、アメリカの諜報機関を扱ったサスペンスものが大半ですが、最近の作品には俗語、

卑語、「けなして」などのラベルがつく“crap”が相当頻繁に目につきます。他の作家の作品ではそれほど目にしないので、彼独特の語り口かも分かりません。そこで『ウィズダム(初版)』を見ると、頻度表示はランク外(E)、語義は名詞として3つ、形容詞、動詞として1つずつ、名詞に句用例が2つ、文用例が1つ、全体で7行の扱いでした。語法注記はありません。これが、第2版ではCランクに格上げ、間投詞としての記述が加わっています。名詞としての語義は3つで、同じですが、句用例が4つに、文用例も3つに増え、語法注記が名詞に3つ、間投詞に1つ、動詞に1つ加えられ、全体として23行のスペースが与えられています。この語の多用はDemilleの個人的な傾向ではないことがこのことから分かります。このように重要語に関しては、初版と比べると相当改訂されていることが分かります。当然、重要語からランク外に落ちた語もあるでしょうが、コーパスを利用した辞書の編纂のメリットの一つは改訂のスピードにあると思われます。勿論、コーパスそのものが最新のものとなっている必要があるのは当然ですが。

とまれ、コーパスを駆使した本格的な辞書として出発した『ウィズダム』が、さらに飛躍を遂げようとしている意気込みが伝わってくる第2版です。これも是非、手にとって見られることをお勧めします。(B6変形版2125頁/定価3,300円(外税)/ISBN 4-385-10569-3)

今回は期せずして、辞書に関する研究書とコーパスを利用した辞書そのものを紹介いたしました。いずれも、本学会のメンバーによる素晴らしい業績です。本学会がそれなりに目的を果たし、貢献していることの証でしょう。

